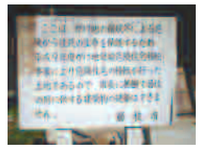
崖のせまる立地のために、やむなく里を離れていく人々……。仙沢川のほとりにたたずむ家を、同じ里の、同じ川のほとりに残したいと思いました。

愛すべき山里に出会いました。
大沢は、藤枝駅から車で20分ほど。葉梨川の上流にあたり、上大沢と下大沢の二地区があります。はじめて訪れたとき、懐かしい面影を残す里のたたずまいに、思わず感動してしまいました。

住戸が消えていく。どうして？
よく見ると、住戸が取り壊された跡地や、誰も住まなくなった納屋・離れが点在しています。聞くと、かつては70戸ほどあったそうです。それが今では14戸ほど。どうしてこうなったのでしょう？

がけ地近接危険住宅指定。
大沢の家々は、「危険から住民の生命を守るため、がけ地近接危険住宅移転事業（藤枝市）」に指定されていました。七夕豪雨の時には、山が崩れて川をふさぎ、多くの家が浸水したと言います。



安全と引き換えに……。
川下の西方、北方に居住を移す方が多いようです。移転した後には、新しく家を建てることはできません。家の解体は里暮らしの解体。長い歴史の里が、記憶だけの里になろうとしています。

ほたる祭りでの、ふれあい。
私たちは、ほたる祭りの日に、駐車場案内係をお手伝いするようになりました。大沢の谷間を乱舞する、小さな光の群れ。そして里人の温かい心。里の暮らしの記憶を残せないものか。そう思いました。

「大沢の家」を残せる！
下大沢の一角にある土地なら移築が可能。そこになら「大沢の家」として残せます。そこで、移転計画中だった青野さんにお願いしたところ、壊す予定の家を譲っていただけることになりました。

移築建築中の「青のさんっち」。

解体、そして移築。
再生に向けての解体です。すべての材に番付を行い、ダメージを与えないようていねいに解体していきます。この屋根裏は中2階と言えるほどの高さ。昔はお蚕が飼われていたのかもしれません。

にぎやかだった、上棟式。
上棟式では、厳かな神事の後に、お餅まきをしました。小雨日よりにもかかわらず、たくさんの里人の方にお集まりいただき、静かな谷間に、歓声があふれ、上棟を楽しくお祝いいただきました。

再生への挑戦！廊下の床張り。
解体時に付けておいた番付け通りに、一枚ずつ床板を張っていきます。壁土で汚れていた板を水で洗い、そり加減をチェックし、合わせ目を削りながら調整し、ていねいに張っていきます。

電気の配線には碍子（がいし）を使って。
現場は竹木舞（こまい）かきが終わり、荒壁塗りを待つばかり。その前に電気配線を少し。打合せでは、木舞を痛めないこと、木舞貫には穴を開けないこと、碍子を使って配線するなど申し合わせました。

この家には、伝統技術も残したい。
いよいよ木舞の荒壁塗りです。粘土質の強い粘り気のある山土にワラスサを混ぜて調合された材料を、さらに「舟」に移してよくこねてから、塗っていきます。技術と力のいる職人さん仕事です。

薪を使うお風呂場と炊事場。
昭和初期のレンガ造りのカマドを譲り受け、慎重に運んできましたが、途中で二つに割れてしまいました。それでも職人さんの手業で見事に復元。当時の煮炊きを再現できるようになりました。

タタキにも技の違いが現れます。
仕上げの最終段階に入り、玄関土間の仕上げです。担当職人さんオリジナルのたたき仕上げ。この日は叩きながら塗りつけ、翌日ブラシでこすります。「年を経るほど味が出てくる」そうです。

頼もしい二代目職人さん。
建具はよく水洗いし、なるべく従前の風情を残すようにしました。やむなく傷んだところは補修。柿渋で仕上げしてある他の建具に合わせて、若い職人さんが色あわせしています。

そして、完成。
移築には多くの職人さんに、力を結集してもらいました。また、各所から貴重な部材が寄せられ、この家に甦りました。実にたくさんの方々のご協力を得て完成した「青のさんっち」です。

里の方と移築お披露目の会。
上棟式から一年を経た、平成十九年の桜咲く季節。里の方をお迎えして、移築完成の集いを開きました。この日から、この里山の一員として正式に仲間入りし、里と私たちの新しい「結」が始まりました。